

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】(2ユニット/1)

事業所番号	2775600659		
法人名	株式会社りんくうライフサポート		
事業所名	グループホームゆうゆう		
所在地	大阪府泉南市信達市場394番地の1		
自己評価作成日	令和3年11月1日	評価結果市町村受理日	令和3年12月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階
訪問調査日	令和3年11月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍の中ですが、お天気の良い日は、1日1回は戸外の空気を吸うことを目標にしている。生活にメリハリをつけ、日中、楽しんで、夜、ぐっすり眠ってもらえるように努めている。職員が台所に立って食事を作り、そこに参加してもらったり、洗濯物をたたんでもらったり、日常の作業に参加してもらうことを大切にしている。また、職員と入居者が一緒に食事をするので、一層、家族としての一体感を感じてもらえていると思う。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

大阪南部の泉南市、駅から徒歩15分の地に鉄骨瓦葺2階建ての開設18年目の事業所である。周辺には畑、ため池が多く、足を延ばせば多くのお寺、旧街道沿いの古い街並みや農業公園がある豊かな環境で、人を大切にお互いが支え合うといった土地柄でもある。利用者は、このような環境のもと、職員の献身的なケアや食事も同じものを一緒にとることで、まるで家族のように穏やかでゆったりと暮らしているのが観察された。コロナ禍で多くの事業所では、面会や散歩・買物等の外出禁止が一般的であるが、当事業所では、人の少ない時間を見計らって車に乗って長慶寺や農業公園のかるがもの里に出かけたり、庭のウッドデッキでの日光浴を楽しんだり、玄関先等での少人数短時間であるが家族等との面会を継続している点が特徴的で、アンケート回答でも利用者家族の好評が窺える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「家庭的な環境と地域住民との交流を大切にし、ご利用者様が尊厳を保ち、安心して暮らせるホーム作りに取り組む」という理念を掲げているが、コロナ禍の中、地域住民との交流はできていない。	事業所の運営理念には、事業所にとり必要不可欠な事項が3つに集約し網羅されている。(左の自己評価欄の記載以外に、法令を遵守し地域から必要とされる施設、労使相互の信頼・責任を前提に働きやすい職場の2項目がある。)運営理念は、玄関、各フロアや事務室に掲示することで職員への周知を図り、日常のケア実践に活かしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入れていただき、回覧板などの地区の情報もいただいている。防災システムにも組み込まれている。	施設長が土地の人であり、職員も近隣住民が多いことから、自然と地域との交流が深く、調査訪問中にも近所の方が、花を差し入れてくれる場面に出会い、日常的な交流があることを感じた。コロナ禍以前は利用者が、敬老会にでかけ色々な催しを見学したり、小学校の運動会に招かれたり、地域との交流が多かったが、現在ではほとんどが中断している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	職員3名が認知症キャラバンメイトとして、地域や学校などで認知症の啓発活動を行っている。泉南市の認知症カフェ活動も中心になって行っている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ここ2年は、Zoomで運営推進会議を開催している。コロナの感染症をどう防ぐか、情報交換が多かった。	コロナ禍の期間中は、市と相談の上リモートによる会議に切り替えている。従来の出席者である市役所や地域包括支援センター等に、家族向け通信「ゆうゆう便り〇月号」(A4カラー刷り4枚に利用者の多くの写真と説明を掲載)を予め送付し、ZOOMでの会議開催時に、市役所等からの評価や情報を得て、会議報告としてまとめファイルしている。	会議報告(議事録)は、公開を原則とし玄関に備え付けのほか、家族等の関係者に配付(郵送等)する事を望む。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には、市の担当者が出席してくれている。認知症のキャラバンメイト活動を市が中心になって行っていることもあり、十分な協力関係を築いている。	長寿社会推進課職員が、運営推進会議(現在はリモート開催)に出席し、事業所の現状を理解し、情報を提供している。一方、市の認知症事業には、事業所からキャラバンメイト3名が協力している。また、市が立ち上げた地域密着型交流会に参加しているほか、生活保護課担当が、事業所に生活受給者の入所時に、来所し確認している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束ゼロをめざし、取り組んでいる。ただ、不穏な場合は、ご家族に説明し、ご理解をいただいた上で、玄関を施錠することもある。基本的には、換気もかねて、扉を閉めず、網戸にしている。	身体拘束適正化のための指針を整備し、運営推進会議の中で委員会開催およびeラーニングによる職員研修を行い、具体的になにが身体拘束に当たるのか職員が理解に努めている。玄関、エレベーター、共用部分は特別な場合を除き、施錠していない。現在は、拘束の具体的事例はない。マットセンサーは、夜間利用者の安全のため一部居室で使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止マニュアルをもとに、事業所内で研修し、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者やケアマネジャーは、成年後見制度について積極的に学ぶ機会を持つようにしている。必要に応じて活用の支援をしていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	大切なことは書面にしてお渡しし、それをもとに時間を取って、十分納得いただけるように説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族から意見・要望があれば、毎月のカンファレンスで話し合っ、運営に反映させるようにしている。	利用者の意見や要望は、日常のケアの中で聞き、家族のそれは、面会時や電話連絡時に聞いている。意見や要望については、毎月開催のミーティングで検討し、運営に活かしている。また、重要事項説明書に苦情に関する事業所(施設長・管理者)以外の外部窓口(市の長寿社会推進課ほか)も明記している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のカンファレンスには、施設長・管理者が出席して、意見や提案を運営に反映させるようにしている。	施設長、管理者は常時事業所にて職員とコミュニケーションをとり、意見や提案を聞いている。また、意見や提案については、毎月開催のミーティングで検討し、運営に活かしている。施設長は、評価判定に伴う面接を毎年5月頃に行っており、この面接時にも職員からの意見や提案等を聞く機会と捉えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、たえず施設内の職員の仕事の状況把握に努め、困ったことがないか、仕事の負担のかたよりがいいかを見極め、労務管理や職場環境の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修案内があれば、つとめて受講を勧めている。また、全員の研修機会の確保のため、e-トレーニングを導入した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	以前は、2カ月に1回、地域密着型施設が集まって、情報交換や事例検討をしていたが、コロナ感染症のため、現在は中止されている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時、これまでのことをご家族やご本人からお聞きし、本人の困っていること、本人がどのようなことを不安に思うか、本人の要望は何かをつかむように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでのことをご家族からお聞きし、家族が困っていること、どのようなことを不安に思うか、家族の要望は何かをつかむように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他のサービスが適している場合には、他のサービスの利用をアドバイスをするようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	毎日、いろいろな日常の作業を共にしたり、食事を一緒に食べる中で、親しみが増し、疑似家族のような暮らしができています。		
		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍のため、ご家族が来られた時は、感染症対策(マスク、エタノール消毒)をした上で、玄関に限らせて面会いただいているが、ご家族の要望を聞きながら、本人がよりよい生活を送れるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍のため、食事などはできないが、マスク着用、換気に気を付けながら、ご家族などとちょっとしたドライブやお彼岸のお参りなどには行けるようにしている。	コロナ禍の間中は、家族との面会を除き、利用者の買い物や外食は禁止している。最近、家族から利用者の馴染みの美容院へ髪染めに連れ出したいとの要望があったが、外食をしないことを伝え出かけて貰った事例がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲のよい関係が築けているか、どの人と仲が悪いかなど把握し、テーブルの席に配慮したり、リビングのソファの座る場所に気を付けるようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	亡くなったり、他のサービスを利用することになった場合も、いつでも相談にのりますと伝え、支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は、一人一人の話を聞く中で、要望を見極め、本人の思いに添うよう、どうすればよいか、職員みなで考えるようにしている。	入所申込は、病院、在宅、施設からのケースが多い。ケアマネジャーや施設から資料を取り寄せ、また施設長等が本人や家族等と面談を行い、一人ひとりの思いや暮らし方の希望や意向の把握に努め、事業所でどのようにケアできるか検討している。入所後は職員が寄り添い、より深く利用者の思いや意向の把握に努め情報を共有しケアに当たっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人やご家族からこれまでのことをお聞きし、ホームでの生活に役立てるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月1回、カンファレンスの時に、職員の気づきを持ち寄り、利用者の状態の変化を皆で話し合っ、現状の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員がご家族や利用者といろいろな話をする中で気づいた、よりよく暮らすためのヒントを持ち寄り、職員全員でケアのあり方を検討するようにしている。	介護計画の作成に当たっては、計画作成担当者が中心となり、本人や家族等、医師・看護師や薬剤師等の医療関係者や事業所職員等の意見・アイデアを取入れ、現状本人にとって最適な介護計画を作成し、家族の同意を得ている。特段の変化が無い限り、1年後に介護計画の見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子は、個別記録に記入し、血圧や排便などは別の用紙に抜き出して体調を管理するようにしている。個別記録では、体温、食欲、夜の様子などがすぐにわかるように記録して、ケアの実践に役立っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者にご家族がない場合、入院などの時にはさまざまなこと(必要な物品の用意、洗濯など)に柔軟に対応している。親戚のお葬式への参列を望まれる場合は、送り迎えなど支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	以前は、地域の催しや博物館で地域の昔の写真展などがあるとみんなで見に行ったりしていたが、コロナ禍のため、最近は見に行っていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームに来られる前にかかっていた病院が市内の場合は、継続して医療が受けられるように通院に付き添うなどの支援をしている。	従来のかかりつけ医に約半数の利用者が通院している。家族と職員で入居後も継続支援を行っている。他利用者は月1～2回の訪問診療を受けている。他科受診時は家族付き添いで受診、歯科は必要時、往診依頼や職員が車で受診同行している。協力医院・病院の医療連携が構築されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気づいたことを看護師に相談したり、医師が往診してくれた時に、気になることを相談するようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	ご家族と一緒に担当医に直接お会いし、病状を聞くようにしている。入院の時は、ホームでの様子を介護サマリーとして病院スタッフに渡し、退院の時は看護サマリーをもらっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご家族には、終末期のホームの方針を書面でお渡しし、ご家族の意向を書類に書いて提出していただくようにしている。体調が悪くなってきた場合は、医師の往診や訪問看護を利用し、ご家族に頻繁に状況をお知らせするようにしている。	入所時に重度化・終末期について書面で説明し、状態変化時に医師から説明がある。看取り決定の場合、「意向確認書」を交わし事業所で出来ること出来ないことを説明している。主治医と訪問看護師の連携をとり、看取り指針に基づき利用者・家族の想いに沿って穏やかな最期が迎えられようチームで支援している。前年度に4件の看取りがあった。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回の避難訓練の時に、救急対応の講習を定期的に行うようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練時に避難の練習や消防訓練を利用者と共に年2回、消防署の指導のもと行っている。また、自治会の防災システムに入れていただいている。	消防・避難訓練を春と秋に定期的実施し、消防署の立ち合いはないが指導を受けている。訓練に民生委員の参加や地域の方の見守り体制が出来ており、職員の数人は近所の住民でもあり、緊急時の連絡網を整備している。備蓄は飲料水・食料品など3日分と衛生用品を完備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	研修で、職員に常に気を付けるよう、啓発している。また、就職時に注意してもらいたい点を書面にして渡している。	「言葉つかい」を一番大切にして利用者と接している。接遇教育・研修で人格・尊厳・プライバシーなど学んでいる。散髪時の髪型は必ず本人に聞いて行い、洋服選びも利用者自身が選び好みの服装が出来るよう支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員が気を付けて、本人の希望を聞くようにしている。服装を選ぶ、髪型を選ぶ、食べたい物を聞くなど、希望を聞いて反映させるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スケジュールを押し付けるのではなく、一人一人のペースを大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服は、自分で選んでもらうようにしている。髪型なども本人に聞いてカットしてもらっている。ただ、認知症が進行すると、自分で選べなくなってくるので、こちらで用意する場合もある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	メニューは、職員が利用者の意見も入れながら作っている。野菜を切ってもらったり、片付けを手伝ってもらったりしている。	利用者が食べたい物・好みを聴き、食材を近隣スーパーに注文し毎日届く。利用者も手伝い、職員が手作りしている。外食は自粛しているが、行事食はおせち・ひなちらし・秋祭りの押し寿司など手作りしている。誕生日会は利用者の希望でお寿司や仕出し弁当をとることもある。おやつは、たこ焼き・ホットケーキ・おはぎなどを一緒に作り、ウッドデッキでおやつタイムを楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	嚥下能力が低下している場合は、きざみ食やミキサー食も用意している。お茶ゼリーなども毎日用意している。夜間、普通にお茶が飲める場合は、部屋にペットボトルを持っていってもらう。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯磨きができる人は、歯磨きをしてもらうが、できない人は、薬品では飲んでしまう危険があるため、お茶で口をゆすいでもらうようにしている。入れ歯は、こちらで預かって、殺菌するようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	それぞれの排泄パターンを把握するように努め、トイレに定期的に誘導するなどしている。	日中はトイレまでその人のタイミングや立ち上がりなど観て声かけ。殆どの利用者がトレーニングパンツとパットで2時間位で声かけている。夜間は3時間毎に巡回し、居室のポータブルトイレの援助やトイレ誘導もある。センサーマット7台とねむリスキャン(モニターで睡眠の状態を介護者が観察する)1台を有し、転倒予防と安眠の支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、廊下やデッキを歩いてもらうようにしている。食事でも食物繊維の多い物を積極的にメニューに取り入れるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	夕食前の夕方に入浴をしていただくようにしている。入浴が好きな人は、ゆっくり入っていただくなど個々に沿った支援をしている。	午後3時頃から一日4～5人を日勤と遅出職員が入浴支援し、ゆったり浴槽に浸かってもらっている。入浴が嫌いな利用者にはシャンプー使用やシャワーと足浴で対応し、無理に勧めず利用者の意向に沿って支援している。入浴剤は使用せず、季節の菖蒲湯・ゆず湯は行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	消灯時間を決めていないので、好きな時間まで起きていることはできる。ただ、高齢になると疲れるのか、寝る時間が早くなる傾向がある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	救急ファイルを作成するときに、職員がそれぞれの薬の効能を調べ、皆で情報を共有して病状の変化に対応できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	以前は、外食や喫茶の機会を作っていたが、コロナのため、最近外出できていない。庭で一緒に花を植えたりはできる。気分転換に誰もいない公園やお寺に出かけることはある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナのため、できていない。	コロナ禍であるが、誰も居ない時間帯にかるがもりの里や長慶寺に車で出かけ気分転換している。日常的に事業所前の駐車場でどんぐり拾いや庭掃除・庭の散歩・ウッドデッキで外気浴や風景を眺めている。ハナミズキやモッコウバラを観ながら日光浴したり、花畑に出て季節の花を取り、リビングに生ける利用者も居る。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナのため、できていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話は、自由に持ってもらっている。ホーム事務所の電話も利用できる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングルームや食堂はベージュを基調としており、季節の花がいつも飾られている。冬は床暖房が入るので暖かい。窓も大きくとっているの、明るい。	夜勤職員が、事業所設備や手に触れる個所をアルコール消毒し、清掃している。空気清浄機を設置、。床暖房を取入れ、リビングは窓を開け換気を心掛け、手洗い励行で感染対策をしている。2階フロア入り口には折り紙のモミジで大きな額のような壁絵、1階フロアにはちぎり絵で「秋の味覚」を飾り、玄関入り口には観葉植物の鉢植えを配置している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや食卓、デスク、玄関ホールなどを利用して、思い思いの場所で座って過ごしている。椅子の配置を工夫するようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は、持ち込み自由でなじみの物を持ってきて、置いている。身近な人の写真や本人の作品、仏壇などを置いている。	全て居室の広い窓から庭や外の風景を眺められ、季節を感じ、陽当たりや風通しが良い。介護ベッド・エアコン・防災カーテン・クローゼット・洗面所の設備がある。馴染みの筆筒・仏壇・昔作った刺しゅう作品や家族写真を飾り、自分好みに居心地よく過ごせるよう配置されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや居室がわかりやすいように表示するように心掛けている。また、手すりを必要な場所に設置して、できるだけ自分で動けるような環境を目指している。		